

日本ロシア文学会 関西中部支部 会報

発行 日本ロシア文学会関西中部支部事務局
住所 〒651-2187 神戸市西区学園東町 9-1 神戸市外国語大学 藤原潤子研究室
電話 078-794-8237 Email junko@inst.kobe-cufs.ac.jp

研究発表会・総会の報告

2023 年 7 月 8 日(土)に関西中部支部の研究発表会・総会が、大阪大学豊中キャンパス及びオンラインで開催されました。

研究発表会

今回は 3 件の研究発表がありました。発表者と題目は以下の通りです。会報の後半に報告要旨を掲載しています。

(1) 松山勝哉 氏(神戸市外国語大学大学院)
「A. クプリーンにおけるパリとモスクワ:ルポルタージュを中心に」
司会: 清水俊行 氏(神戸市外国語大学)

(2) 木寺律子 氏(京都産業大学)
「『カラマーゾフの兄弟』におけるサクランボのジャム」
司会: 齋須直人 氏(名古屋外国語大学)

(3) 大平陽一 氏(天理大学)
「ロスマンのグラフィックデザイン:戦間期ブルノの機能主義」
司会: ヨコタ村上孝之 氏(大阪大学)

支部総会

1) 運営委員会メンバーの変更(敬称略)

これまで関西支部では「理事 4 人+事務局長+学会誌編集委員」で運営していましたが、中部支部との統合により「理事(6 人)+事務局長」に変更になりました。現在の委員会メンバーは以下の通りです: 金子百合子(支部長)、藤原潤子(事務局長)、杉本

一直、中澤敦夫、横井幸子、ヨコタ村上孝之。

5 月に行われた次期役員選挙と総会での審議・承認の結果、9 月からの運営委員会メンバーは以下のように決定しました: 金子百合子(支部長)、北井聡子(支部長代行)、木寺律子、本田晃子、齋須直人、高橋健一郎、藤原潤子(事務局長)。事務局長を除く上記役員 6 名を関西中部支部より日本ロシア文学会に理事候補として推薦します。

尚、選挙結果により理事候補となった場合、支部役員選任規定(6)による辞退権限を有する者および支部移動の予定者に関しては選挙結果判明後に辞退の申し出を受け付け、役員候補として選挙結果の次点の会員を繰り上げる事務局案を審議の上承認しました。

2) 会員の異動(敬称略)

関西・中部支部統合による現状報告

正会員 134 名+会友 16 名

その他の支部からの異動

木村崇(関東東北支部から)

黒岩幸子(京都外国語大学、関東東北支部から)

笹山啓(富山大、関東東北支部から)

会友の入会

千頭敏史(むうざ) 推薦者: 杉野ゆり、前田俊之

松山勝哉(神戸市外国語大学大学院) 推薦者: 清水俊行、藤原潤子

3) 決算・予算について

2022 年の関西支部総会で承認済の 2021~22 年度(2021 年 9 月~22 年 3 月)の仮の決算報告が正式に承認されました。また 2022~23 年度(2022 年 4 月~23 年 3 月)の決算報告と 2023~2024 年度(2023

年 4 月～24 年 3 月) の予算案が承認されました。

決算：2021 年 9 月～2022 年 3 月

収入

費目	予算	決算
繰越金	—	654834
会費	—	9000
利子	—	2
合計	—	663836

支出

費目	予算	決算
通信費	—	0
総会運営費	—	0
理事候補選挙費用	—	0
文具費	—	0
交通費	—	0
その他 (うち 7000 円は誤振込の返金。他はゆうちょ手数料)	—	7963
時期への繰越金	—	655873
合計	—	663836

決算：2022 年 4 月～2023 年 3 月

収入

費目	予算	決算
繰越金	655873	655873
会費	0	0
利子	4	4
合計	655877	655877

支出

費目	予算	決算
通信費	5000	0
総会運営費	50000	0
理事候補選挙費用	0	0
文具費	2000	0
交通費	6000	0
その他	1000	0
時期への繰越金	591877	655877
合計	655877	655877

4) 会費、入会費について

年間 1000 円の支部会費に加え、入会費 1000 円も当面無料とします。

5) 次期監事

中澤敦夫氏と中野幸男氏に決定しました。

6) 次期当番校

来年度の研究発表会・総会は、神戸市外国語大学を会場にハイブリッド開催で行うことが決まりました。

研究発表会報告要旨

A・クプリーンにおけるパリとモスクワ
——ルポルタージュを中心に——

松山勝哉(神戸市外国語大学大学院)

帝政ロシア末期から活躍した作家アレクサンドル・クプリーンの創作において、故郷というテーマ自体は、比較的初期の作品から、とりわけ、『尋問』(1894)以降の一連の軍隊小説において登場していた。しかし、それらの作品において、故郷は、登場人物たちに想起される空間として、断片的・間接的に表現された。彼自身の故郷であるモスクワが、直接的に、故郷というテーマを担った上で表出されるようになるのは、『レーノチカ』(1910)のような少数の例を除けば、1920年から1937年までのパリ亡命期間中のことであった。

クプリーンが故郷モスクワをそのように表出するようになったのは、ロシア国外に亡命したことによって、故郷へのノスタルジーが増大したことが、主な原因であると言える。しかし、クプリーンにおけるモスクワは、単なる幼年・少年時代の生活空間とは言い難い経緯を有している。一歳の頃に父親を亡くしたクプリーンは、幼い頃から寄宿制の教育施設に入れられ、母親の意向で、軍人となるための教育を受けた。施設の外のモスクワは、当時の彼にとって、休日にもみ訪れることの出来る空間であった。その上、モスクワの士官学校を卒業して以降も、彼のモスクワ滞在は一時的なものに留まり、モスクワが彼の生活拠点となることのないまま、パリ亡命へと至ったのである。

亡命以前のクプリーンは、帝国領内において、遊動性の強い生活を送っていた。だが、亡命時には、主にパリ十六区内での定住性の強い生活を余儀なくされた。亡命当初、二十年代前半、クプリー

ンは、主に政治評論を多数発表するようになり、それによって、生活資金を稼ぐと同時に、ソヴィエト・ロシアに対するイデオロギー的闘争を行った。だが、二十年代の半ばから、彼は、政治評論から、小説やルポルタージュの執筆へと活動の場を移し、主に、過去のロシアへのノスタルジーが強い作品を発表した。彼が故郷モスクワを表現するようになるのは、この時期においてである。だが、これとほぼ同時進行で、彼がパリについてのルポルタージュを複数発表していて、その中で、パリとモスクワとの間に、彼が積極的に共通点を見出そうとしているというところに注目したい。

パリ亡命当初にも、クプリーンは、既に、『パリ』(1920)や『パリのロシア人』(1921)において、パリの印象について言及しているが、そこではパリはパリとして捉えられているのに対し、1925年1月に発表した『パリとモスクワ』以降は、彼のテキストに、この二つの都市に共通する特徴を見ようとする傾向が顕著に現れる。このルポルタージュの発表の直前、1924年12月に発表した『故郷』において、彼が、パリ亡命生活の中で故郷の記憶が「黒い穴」となって消えていく嘆きを表現していたことを念頭に置くと、このことは、記憶から徐々に消失されていくモスクワを、内的に、観念的に奪還しようとする試みであったと見ることが出来る。これは、政治評論から小説・ルポルタージュへの執筆活動の移行とも一致する傾向であり、この時期から、生活空間パリは、クプリーンが奪還しようとする観念的なモスクワを発見す

るための空間としての機能が与えられる。

そのような試みの中において、もちろん、パリの風景の中に見出すことが出来ないものも浮上してくる。例えば、『モスクワの雪』（1929）はその典型で、この作品では、彼の士官候補生時代の休暇について語られている。空間のみならず、時間においても、パリの生活から切り離されてある記憶は、パリの向こうにあるものとして想起される。ここにおいて、モスクワは、軍隊学校での生活とその余暇とを過ごしたという一回性の物語の中で

捉えられ、観念性の強い世界として表出されている。この世界観が展開された作品として、同時期に執筆された『士官候補生』（1933）が挙げられる。

晩年のクプリーンの亡命期において、故郷モスクワの創出は、創作における大きな主題となり、彼の作品の中であまり表現されてこなかった、彼自身の土地が、ここにおいて描かれるようになる。そのようなモスクワが形成されるにあたって、パリの印象は、彼の主観的なモスクワを見出す場として、重要な役割を果たしたのである。

『カラマーゾフの兄弟』におけるサクランボのジャム

木寺 律子(京都産業大学)

F.M.ドストエフスキー（1821-1881）の最晩年の大作長編小説『カラマーゾフの兄弟』（1880）については、多くの先行研究があるにもかかわらず、まだまだ作品を読み込めていない面がある。本発表では、作品にわずか2回描かれるだけの「サクランボのジャム」を手がかりに、作品全体をより深く理解することを試みる。

ゾシマ長老は大往生を遂げたはずであったが、その後遺体が腐臭を放ったことがきっかけで、死後にまで周囲の人々からさんざん悪口を言われるようになる。ロシアでは、聖人の遺体は腐らないという伝統的な考え方があった。この不朽体については先行研究があり、渡辺圭も論じ、『カラマーゾフの兄弟』のこの場面を、オープンチナ修道院の長老聖アムブローシイやザドンスクの聖ティーホンのイメージと関連づけて論じている。ゾシマ長老を敬愛していたアリョーシャはこれで信仰を失いかけるほどである。

ところで、ゾシマ長老に対する悪口の中には、彼が精進を守っておらず、サクランボのジャムを町の女性陣から届けてもらって食べていたという指摘もあった。

実はこのサクランボのジャムは、これより以前

の場面でも小説に登場している。アリョーシャが、兄イヴァンと会って大審問官の詩について聞く時に、兄イヴァンはアリョーシャが子供の頃にポレーノフさんの家でサクランボのジャムを好んでいたことを指摘するのである。サクランボのジャムは、アリョーシャにとってポレーノフさんの思い出の象徴でもあり、兄イヴァンと子供時代の話をしたことで、兄との絆を実感した面もあったであろう。

アリョーシャがゾシマ長老の死後に期待されたような奇跡が起こらず、この衝撃で信仰を失いかけるのは、単にゾシマ長老の腐臭だけが問題ではない。腐臭の原因としてサクランボのジャムなどが指摘されたのを聞いたせいでもある。アリョーシャにとっては、サクランボのジャムが否定されれば、自分自身も兄イヴァンとの子供時代も世話になったポレーノフさんの思い出もすべて否定されることになる場所であった。サクランボのジャムそれ自体は些細な問題であろうが、これがゾシマ長老だけでなく、アリョーシャのうちにもあるのかもしれない罪の象徴となっている。サクランボのジャムは、この作品が提示する、神への懐疑と、それを乗り越えた上で獲得できるよりしつ

かりした信仰心の両方と関わるものなのである。

ロスマンのグラフィックデザイン: 戦間期ブルノの機能主義

大平 陽一(天理大学)

本報告では、戦間期のブルノで活躍したデザイナー、ズデニェク・ロスマンについて紹介する。日本に限らず、チェコのアヴァンギャルディストについて論じられる際、取上げられるのは全員プラハで活動した芸術家だ。もっぱら地方都市ブルノで活動したロスマンは、それだけで異色の存在に見える。実際、彼の知名度は高くない。それにもかかわらず、ロスマンの創作をあらためて検討に付すことには大きな意味があるように思える。なぜなら、彼こそはチェコ・アヴァンギャルドの地方的変種を代表するデザイナーであり、その創作の再検討は、とりもなおさずプラハ中心のアヴァンギャルド像に一定の修正を迫ることになるのだから。

ロスマンがブルノに移り住んだのは1923年のこと、当地の工業高等専門学校建築科に入学するためであった。結局27年に中退するが、在学中から学生演劇などの文化活動にかかわり、セノグラフィやチラシなどのデザインを手がけていた。高専を中退した翌年には現代文化博覧会の広報部に職を得ていることからして、学生時代からすでにプロ級のデザイナーとして認められていたのだろう。博覧会終了後は、まずブルノの機能主義建築を第一人者であるフクスのアトリエで、続いてモダンな家具を製造販売していたヴァニェクの会社でグラフィックデザイナーとして働いている。

1918年のチェコスロヴァキア共和国の独立後、周辺地域を併合したブルノでは都市化が進んでいた。都市計画が立案され、フクスに代表される機能主義者たちの建造物が数多く実現した。ブルノは今なお多くの見本市の開催される都市として有名だが、そのための恒常施設が機能主義者たちによって建設されたのも、この時期のことだ。見本市や博覧会はパヴリオン建設だけでなく、展示、ポスター、カタログ、チラシ等、多くのデザインの仕事を生み出し、ブルノ

は一躍アヴァンギャルドの街となった。ただそれはモダンな建築、展示デザイン、グラフィックデザインの分野の——すなわち機能主義・構成主義の——中心地であり、そこにはプラハのようなフランス起源のシュルレアリスムの文学や美術が欠けていた。

こうしたブルノの特異性は、独立直後の建築ブームだけがもたらしたものではない。長らくバイリンガル都市であったブルノは、ドイツ語圏の文化の影響が強かった。ロスマンに仕事と影響を与えた家具デザイナーのヴァニェクは、「装飾は罪悪」という主張で知られる建築家ロースの——ブルノに生まれウィーンで活躍したロースの崇拜者であった。ロスマン自身も、急進的な左翼思想で知られる建築家でバウハウスの校長だったマイヤーの教えを受けるためにバウハウスに留学しているが、その留学の十年近く前から、バウハウスのグラフィックスやチヒョルトの『ニュータイプグラフィ』の影響の色濃いタイポグラフィを実践していた。本文においてさえ大文字を排除する、バウハウスの《ユニヴァーサル・プロジェクト》の原理を忠実に実践したのは、チェコではロスマンひとりだった。小文字とは字形の異なる大文字は識字教育にとって不要な障害であるという考え方は、機能主義的である以上に、反ブルジョワ的、民主的な発想に根ざしており、ロスマンの機能主義を政治的左翼の方に急進化させたい。ロスマンのブックデザインはひじょうに洗練されたアヴァンギャルド・デザインの典型のように、今日の観者の目には映るが、それは芸術清算論を叫ぶタイゲの構成主義論や、あるいはバウハウスの機能主義の忠実な実践であった、と言えなくもないのである。視覚的情報伝達に対する機能主義者らしい関心にしても、《赤いウィーン》において教育のない大衆に複雑な社会経済の事実を伝えるためにノイラートが考案した《アイソタイプ》への関心が出発点であった。

しかし、1930 年前後から、ロスマンのブックデザインに正統的機能主義からの離反が起こっているのは事実であるように思われる。余白を大きくとった表紙に印刷されている書名には、機能主義者らしくサンセリフ体を用いているが、その一方で小さく印刷された著者名には優雅な筆記体が使われ出し、それがあつ種の抒情性をもたらしている。ロスマンは評論の中で「脳の抒情性の常数」について論じるようになるが、

私見によれば、こうした変化をもたらしたのは写真の利用であつた。ロスマンは、写真が必要以上に多くの情報を伝達することを問題視し、特定の情報だけを伝達するための手段としてクローズアップを推奨しているが、そうした対象の断片化にもかかわらず写真は必要以上の情報を伝えながら、その一方でロスマンの意図せざる美的機能を、メニミーのもたらしめる美的機能を発揮している。